

はじめに

上賀茂神社で行われている競馬会神事（以下、賀茂競馬）は寛治7年（1093）に始まったとされ、著名な物語や絵巻物に登場したり、著名な人物が観覧に訪れたという記録が残っていたりするなど、非常に有名な祭であったことはよく知られている。賀茂競馬は宮中武徳殿で行われていた五月五日節の競馬を移したものであるとも伝えられている。現在にまで日本の古式競馬を残すのは上賀茂神社に限られていることから、賀茂競馬の儀式を検討し、同時に過去の古式（賀茂）競馬儀式次第とを比較し、その違いを明らかにすることは、賀茂競馬の考証にとって重要なことである。

日本に古くから伝わる競馬は、記録上大宝元年（701）五月五日、文武天皇臨席の元で五位以上の群臣に走馬を出させた「続日本紀」にまで遡る（土橋氏のご教示によると、二頭駆けであったかどうかは不明だが、九世紀の資料では「競馳」とあるため、その可能性は高い、とのこと）。元来宮中で行われていた競馬とは、この記事にみられるように、五月五日の端午の節供に天皇の下で走馬を行うことを言う。現在の西洋競馬とは形式が異なり、1回のレースは左右2頭、10番20人で行われる。9世紀の末頃から社寺で、10世紀中頃には有力貴族の邸宅でも競馬が行われた。その後、特に社寺では年中行事として競馬が定着し、盛んに競馬が行われていたようであるが、南北朝時代以降、相次ぐ戦乱や社会の変化により、競馬は衰退した。賀茂競馬は、官人だけでなく神社の氏人が乗尻を務めていたこと、神社周辺に競馬料として多数の荘園を安堵されていたこと、幕府や有力者の信仰が篤かったことなどにより、古式競馬の伝統が現在まで守り伝えられてきている。

過去の史料や絵画をみると、現在行われている賀茂競馬とは少し趣が異なった様子も描かれている。例えば、絵画の中には、相手の体を引っ張ったり馬具を奪ったりする様子が描かれているものがある（「賀茂競馬屏風図」）。これは、競争中の妨害行為も許されていたことを示している。また、見物人が竹で馬や乗尻を叩いて装束を破損させられたり落馬したりもしていたようである（「賀茂競馬記」万治元年（1658）五月五日の記事）。このような、ある時代のいわゆるスナッフショットを知ることばできても、現在の儀式次第が、どの程度宮中で行われていた競馬を引き継ぐものであるか、時代の変遷による儀式の変化がどのようなものであるのか、といったことはまだよく知られていない。

今回、京都府立総合資料館に所蔵されている「競馬秘記」という史料を翻刻・輪読する機会に恵まれた。翻刻の前半部分は土橋（2004）によって既に刊行され、後半部分も来年度に刊行される予定である。しかし、内容の解釈に関しては、1)当時の暗黙の了解が現在では通用しない、2)語句の説明があっても作法が伝承されていないため復元できない、などの理由によって非常に難解で、未だ稿としてまとめるまでには至っていない。そのため、本稿では「競馬秘記」の輪読に至った経緯の報告と、翻刻を進めて行くうちに明らかとなった興味深い点をいくつか紹介したい。

「競馬秘記」輪読の経緯

2003年春、京都文化博物館において特別展「京の葵祭展」が開催された（京都文化博物館、2003）。この展示は葵祭りの歴史やありかたをさまざまな資料や作品を通じて見ていくものであるが、賀茂競馬に関する展示のなかに、「競馬秘記」という史料が出品されていた。解説に「乗尻の心得や勝負の作法について書きまとめたもの」とあり、過去の乗尻の乗り方や作法に興味を持っていたことから、この史料について詳しく知りたいと思っていた。幸運なことに、京都文化博物館学芸員土橋誠氏にお目にかかる機会を得、また、史料自体は京都府立総合資料館のWebサイトで公開されていたこともあって、翻刻・輪読を進めていくこととなった。「競馬秘記」の翻刻は土橋氏が行なわれ、解釈と一緒に進めていくこととなった。輪読には同族会市忠頭・聡頭

氏、池坊短期大学小倉嘉夫氏にも加わって頂けることになり、月1回のペースで進めていくことになった。

「競馬秘記」について

「競馬秘記」の存在自体は過去から知られている（例えば源城（1992）、日本馬術協会（1941）等）。京都府立総合資料館に所蔵されている「競馬秘記」は、賀茂保家が所蔵していたものをもとに岡本（賀茂）清茂が筆写したもので、正徳6年（1716）に異本と校合している。この異本は、賀茂保益所蔵の「仲国自筆本」を賀茂清古が寛永8年に書写したものである。仲国は、本文中に嘉禄2年（1226）に中身を記したという「前筑後守高階朝臣仲国」と見られる。つまり、奥書を信用すれば、内容的には鎌倉時代前期に書かれたものと推定される（土橋、2004）。

「競馬秘記」の原本が書かれた鎌倉時代前期は、古式競馬が盛んに行われていた時期に相当する。日本の古式競馬についての解説は長塚（2002）に詳しいが、この時代は特定の寺社に偏らず、例えば鳥羽城南寺・岩清水八幡宮・下上賀茂社・日吉社・新日吉社・祇園社・梅宮社・春日社・二条殿・高陽院などで催され、乗尻は院に仕える近衛府などの官人、馬は自身の馬を使ったようである。「競馬秘記」の中にも、「頼久」や「兼直」といった名前が出てくるが、同時代(1180-90頃)に新日吉社小五月競馬に同名の者が隨身として奉仕している（藤島（1977）がまとめた新日吉小五月会の年表中に、それぞれ左府生秦頼久、および単に「兼直」と出てくる）。原典を確認していないので名前の同定はもう少し丁寧にやらなければいけないが、内容が同時代であることを証明できる一つの証拠であると考えている。

現在上賀茂神社で行われている競馬会神事との比較

輪読を始めた当初、この史料は賀茂競馬の乗尻の心得や勝負の作法について書きまとめられたものと考えていた。しかし、読み進めていくうちに、実は我が国の古式競馬全般に関するもので、鎌倉時代前期というかなり古い時代の記述であることがわかった。より詳細な考察は別稿にまとめる予定であるが、現在の競馬会神事と比較して興味深い点をいくつか紹介する。

・三遅

三遅とは、埒内に馬が入ったとき、馬に馬場を見せたり、乗尻が馬の癖を見極めたりするために行う儀式（知らない観客にとっては、単にぐるぐる回っているようにしか見えない）であるが、「競馬秘記」にも記述がある。現在の三遅のコースと同じかどうかはわからないが、三遅は古式競馬一般に行われることであったようだ。

一（前略）兼仲が申して云、三遅は馬の心を乗見んがためなり。一遅は三丈に寄すべし。二遅は二丈に、敵の埒に乗り渡して面をあはずべし。馬の顔乗尻の顔同事也。能々ならふべし。三遅一丈の内に控ふべし。鐙の鼻を合はずべし。此三遅の心は、一遅は遠て馬いかがありと、二遅はうちふみの埒に付けたらんは心を知らんためなり。三遅に鐙をすらする心に近くていかがと試みむため也。此たびのいり様は互いに馬の尻をすらすべし。是も様々に馬を試みんため也。

・埒

埒は柵のことを指すが、現在の競馬会神事もこれとおよそ同じである。

一埒の高さ左三尺、右三尺三寸、広三丈三尺、これは馬さくりを加へたる定なり。右近の馬場、法金剛院の馬場、此定なり。埒の長さ所によるべし。世の常の広さ三丈也。（中略）

一鉾の埒の長は二説あり。鼓のおもてより、鉾の前まで廿一丈か。又曰く廿四丈といふ説あり。

・纏頭（テンドウ）

競馳の後、左右の乗尻がそれぞれの階下に勝負を尋ね、勝もしくは持（引き分

け)の場合禄(絹)を鞭に掛け、頭の上で二辺ぐるぐるまわす。同じ方法だったかどうかはわからないが、これも鎌倉時代まで遡れると考えられる。御所より別に禄を頂いたときは前にもらったものを棄てる、と書かれているのが面白い。

「ひらみて」とあるので、本来は頭を下げるべきかもしれない。

一纏頭立てらんときは、ひらみて鞭にかけて賜はるべし。御所より別禄に預かる事あらば、もと賜はりたる纏頭をば棄てて、府のものを召して賜ふべし。上よりのばかりを賜はれ、これは秘蔵の事なり、兼弘が物語とぞ受け給はりし。

まとめ

現在の賀茂競馬と鎌倉時代前期の競馬に関する記述とを比較することにより、現在の儀式次第の中に鎌倉時代前期にまで起源が遡れるものが存在していた。現在(2004年9月)までに、古式(賀茂)競馬に関する史料は、すでに翻刻・現代語訳されたもの(例えば、古代から競馬に関する記述をまとめたもの(日本競馬史編纂委員会, 1966), 「嘉元年中行事」の賀茂競馬の儀式次第(日本祭礼行事集成刊行会, 1970), 五月五日節の解説と儀式次第(大日方, 1994)等)や、図書館等で史料が検索され、主に土橋氏によって翻刻が進められている(中大路家文書「競馬口伝抄」, 鴨脚家文書「五月朔日足汰乗尻覚悟記」等未定稿)ものがある。特に、「競馬口伝抄」は「競馬秘記」とほぼ同時代に成立していることがわかっており、内容も共通しているものが多い。この史料とも比較することによって、鎌倉時代の競馬の内容をより詳細に明らかにすることができると考えている。また、江戸時代の史料には儀式次第について触れているものもいくつか存在している(例えば、鴨脚家文書「五月朔日足汰乗尻覚悟記」, 競馬記(源城, 1992; 1993; 1994), 「賀茂社記」寛永13年五月の記事(長塚, 2002)等)。これらを年代別・儀式手順別等に分類し、考察を加えることで、賀茂競馬の儀式考証に資することができれば、と考えている。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、京都文化博物館学芸員土橋誠氏には有益なコメントをいただいた。また、「競馬秘記」の輪読をはじめ、史料収集等でご配慮を頂いた。

注

本文に転載した翻刻部分は、読みやすくなるよう筆者が適宜漢字に直したり異本注記部分を補ったりしているので、土橋(2004)または原典を参照のこと。

参考文献

- 大日方克己, 1994: 古代国家と年中行事 二 五月五日節—律令国家と弓馬の儀礼—。吉川弘文館, 40-90。
- 京都文化博物館, 2003: 京都文化博物館 開館15周年記念特別展 京の葵祭展—大朝絵巻の歴史をひもとく—。京都文化博物館, 167pp。
- 源城政好, 1992: 賀茂競馬会神事関係資料(一) 競馬記。賀茂文化研究, 1, 73-91。
- 源城政好, 1993: 賀茂競馬会神事関係資料(二) 競馬記(一)。賀茂文化研究, 2, 81-96。
- 源城政好, 1994: 賀茂競馬会神事関係資料(三) 競馬記(二)。賀茂文化研究, 3, 105-120。
- 土橋 誠, 2004: 翻刻: 『競馬秘記』。京都文化博物館研究紀要 朱雀, 16, 77-87。
- 長塚 孝, 2002: 日本の古式競馬—1300年の歴史を辿る—, 神奈川新聞社, 109pp。
- 日本祭礼行事集成刊行会, 1970: 賀茂社嘉元年中行事。日本祭礼行事集成第3巻, 平凡社, 121-123。
- 日本乗馬協会, 1941(1980復刊): 日本馬術史, 原書房, 全4巻。

日本競馬史編纂委員会，1966：日本競馬史 卷1. 日本中央競馬会，580pp.
藤島益雄，1977：小五月競馬の起原並新日吉小五月会. 新日吉神宮，254pp.